

# 〈全該当〉を表す語の主観性と集合形成 —頻度副詞「いつも」と取りたて助詞「ばかり」の比較—

佐藤 琢三

## 要旨

本稿は、頻度副詞「いつも」の意味的特徴について論じるものである。母語話者の素朴な直観として、「いつも」は例外のない〈全該当〉を表しつつも、実際には大幅な例外解釈も許容するという点で二面性を有する。同様の特徴をもつ語としては、取りたて助詞「ばかり」、集合名詞「みんな」などがあげられる。「いつも」がこのような特徴を有するのは、知覚経験を通して得られた経験記憶の集合における〈全該当〉を表す点に原因がある。すなわち、あくまで話者の経験記憶内における〈全該当〉であるため、結果として現実世界における例外を許容することとなる。また、話者は発話時点における文脈・状況の下で活性化された無標の情報について述べるものであり、その時点で「ぱっと」思い浮かんだ経験記憶を述べることになる。なお、同じく〈全該当〉を表す取りたて助詞「ばかり」において、記憶集合形成の動機となっていると思われる「認識の際立ち性」という要因は、「いつも」においては特段、関与的ではない。

キーワード：「いつも」、全該当、知覚経験、経験記憶、「ばかり」

## 1 はじめに

本稿は、基本的な語義として〈全該当〉を表しつつも、大幅な例外解釈をも許容する語の主観性の内実につき、語の文法的位置づけ（品詞）をこえて横断的な分析を試みるものである。「いつも」（頻度副詞）、「ばかり」（取りたて助詞）、「みんな」（集合名詞）の3語は、いずれも基本的に〈全該当〉を語義の前提としながら、同時に大幅な例外解釈をも許容する点で共通する特徴を有するものである。

前の月に週2回のペースで学校に遅刻した高校生の娘がいたと仮定しよう。通っている高校が週6日制であるとする、約67%の確率で学校に間に合っており、遅刻の確率は約33%である。つまり、客観的な事実としては、圧倒的に間に合った日の方が多い。

- (1) (母親の娘に対する発話)
- a あなた、いつも学校に遅刻してどうするの。 <頻度副詞>
  - b あなた、学校に遅刻してばかりでどうするの。 <取りたて助詞>
  - c あなた、いつも学校に遅刻してばかりでどうするの。
- (2) ((1)の母親の発話に対する娘の反駁①)
- a 「いつも」じゃないよ。週4回も間に合っているよ。
  - b 「遅刻ばかり」じゃないよ。週4回も間に合っているよ。
- (3) ((1)の母親の発話に対する娘の反駁②)
- それに遅刻なんて、みんなしているよ。 <集合名詞>
- (4) ((3)の娘の発話に対する母親の反論)
- 何いつているの。みんなが遅刻しているわけではないでしょう。
- (5) ((4)の母親の発話に対する娘の反駁)
- だから、その「みんな」じゃないんだよ。

母語話者であれば容易に理解できることであるが、これらは日常の日本語の会話としてごく自然なものであり、また、頻繁に耳にするものである。(1)において母親は、33%にすぎない娘の遅刻に関して「いつも」「ばかり」をごく自然に使用している。つまり客観的には圧倒的な少数事例をとりあげて、あたかもそれが例外のない<全該当>であるかのごとく発話している。これに対する(2)の娘の「いつも」「ばかり」は、(1)の母親の発話と矛盾するかに思えるが、これも日常言語の使用として同程度に自然なものである。つまり、娘は「いつも」「ばかり」は<全該当>を前提とする語であって、これを33%の少数事例に適用するのは妥当でないと述べている。集合名詞「みんな」についても同様で、遅刻しているのは一部の生徒であると想定すると、(3)では遅刻をしている一部の生徒のみを「みんな」で指示しているが、他方、(4)において「みんな」は<全該当>の語であることが主張されている。

(1)~(5)にみられる曖昧さは、決して日常言語の運用上の曖昧さだけに帰することができるものではなく、語義そのものに根本的な原因がある。このことは、同じく<全該当>を表す「常に」「だけ」「全員」と対比することで明確になる。<sup>\*1</sup>

- (6) 君は {いつも / ??常に} 居眠りをしているよね。
- (7) (月曜日から土曜日はビールを飲み、日曜日はワインを飲んだ場合)  
先週はビール {ばかり / \*だけ} 飲んだ。
- (8) 日本人は {みんな / \*全員} 勤勉だ。

例外解釈が明らかに可能な場合において、「常に」「だけ」「全員」の使用がまったく不自然である一方、「いつも」「ばかり」「みんな」の使用はごく自然である。母語話者の素朴な直観としてこれらの語が<全該当>を表すということと、実際の言語の運用にお

<sup>\*1</sup> 本稿において、「\*」は最も許容度が低いことを示し、次いで「??」、さらに「?」の順で低いことを示している。

いて問題の3語が大幅な例外解釈も許容するという事実は、一見してあい矛盾するかにも見える。本稿は基本的な方針としてこの矛盾するかにも見える両面を認めたくえて、これらに対して自然な理解の道筋を探ろうとするものである。

本稿は、これら3語のうち、頻度副詞「いつも」の分析を主眼とする。ただし、これらの語は文法的位置づけ（品詞）をこえて、一定の度合いで共通の認知的基盤に基づくとの想定にたつ。佐藤（2017）では、上述の問題意識に則って取りたて助詞「ばかり」の分析を進めた。本稿においては、これをふまえたうえで頻度副詞「いつも」について考察する。

## 2 「いつも」の知覚経験と文脈的無標性

### 2.1 「いつも」の基本的特徴

「いつも」の矛盾するかにも見える特性は、この形式がわれわれの身を囲む現実世界について述べるものではなく、われわれの知覚経験に基づいて形成された経験集合について述べる点に根本的な理由がある。「いつも」は現実世界のありようを述べるものではない。その帰結として、現実世界のありようとしては決して<全該当>ではなくても、話者の知覚経験に基づいた記憶集合のありようとして<全該当>である場合、前節でみたような、現実との表面上の乖離が生じる。また、このような知覚経験が想起される原因として、「いつも」の文が述べる事態は、当該文脈において、話者にとって活性化されている無標の情報であるという点を指摘する。

### 2.2 「いつも」と知覚経験

#### 2.2.1 「いつも」と知覚経験

本稿の主要な主張の要点は、「いつも」が直接的には現実世界のありようを述べているのではなく、われわれの知覚経験に基づくという点にある。そのため、客観な事実としては例外なく成立する事態であっても、われわれがそれを知覚経験を通して得たものであるという解釈が成り立ちにくい場合、「いつも」の文は成り立ちにくい。

(9) 化学結合により結びつけられた分子内の原子は、内部エネルギーにより  
{|\*いつも／常に|} 振動する特徴をもっている。

(10) 地球は {|?いつも／常に|} 太陽の周りを公転している。

(9)において述べられている原子の振動とは、常時成立している動きであると思われるが、普通に解釈すれば話者の知覚経験に基づいて発話されたものとは考えにくい。普通、

原子レベルの微小な世界はわれわれ人間が知覚できる境域の問題ではない。(10)は逆に広大な宇宙において生じている事象について述べており、これもわれわれの知覚経験を直接述べているものとは考えにくい。この例においても「常に」が非常に自然であるのに対し、「いつも」は何らかの文脈を想定しなければ不自然である。科学的真理とは、あくまで客観的な叙述であるので、われわれの経験とは切り離れた形で述べるのが普通である。

ただし、科学的な叙述であっても、われわれの知覚経験に基づいた叙述としての解釈可能な場合は、「いつも」の使用もごく自然なものとなる。

(11) 私が観察した限りでは、この分子内の原子は {いつも／常に} 振動していました。

(12) 一等星のシリウスは {いつも／常に} 強い光を放っている。

上の(9)において「いつも」がまったく不自然であるのに対し、(11)のように研究活動という話者の知覚活動が前提となっている場合、「常に」のみならず「いつも」の使用もごく自然なものとなる。(12)も同様で、「光を放っている」という叙述は、われわれの知覚経験に基づいて述べられているとの解釈も容易になされるものであり、(11)と同様、ごく自然である。

また、「いつも」は知覚経験に基づくものであるため、未来におけるの事態について語る文脈と基本的に相性が悪い。

(13) a 定年退職したら、{??いつも／毎日} 何をして過ごそうか。

b 定年退職した後は、{いつも／毎日} 朝、早起きしています。

(14) a 大学院に進学したら、{\*いつも／毎日} 猛勉強するぞ。

b 大学院に進学してから、{いつも／毎日} 猛勉強しています。

(15) a {??いつも／必ず} 処方された薬を飲んでください。

b 病気をしてから、{いつも／必ず} 処方された薬を飲んでいきます。

(13)(14)(15)の各a文は、未来事象について述べるものであるが、知覚経験に基づいて未来の事象について述べるのは不自然である。同様の事象を発話時以前に経験しているb文の場合、「いつも」の使用はごく自然である。

以上の議論から、「いつも」は現実世界のあり方における<全該当>を述べるものではなく、われわれの経験を語るものであるという点で、非常に主観的な性質のものであることがわかる。「いつも」は知覚経験を通してえられた記憶の集合における<全該当>を述べるものと考え、語義としては<全該当>を表すという素朴な直観と、現実には例外も非常に多いという表面上の矛盾に自然な理解を得ることができるだろう。

## 2. 2. 2 非経験事態の例外

2. 2. 1でみたように、「いつも」は非経験事態との親和性が低い。ただし、例外らしき事例がないわけではない。例外らしき事例には2つのタイプがある。まずは、1つめのタイプについてみていく。

(16) これからも、私はいつもあなたの味方です。

(17) いつも元気でいてください。

(18) いつも素敵な貴方でいてください。

(16)において、「これからも」と述べられていることから、未来の非経験事態を述べていることは間違いないが、「いつも」の使用はごく自然である。未来の事態は知覚の対象ではありえない。また、(17)(18)も未来において元気な状態であること、素敵な状態であることを希求するものであるため、やはり非経験事態である。したがって、これらは、2. 2. 1で述べた原理の例外ということになる。本稿の筆者としては、これらの例外の理由についてはまだ確定的な結論を得ていないが、現時点においては、暫定的に以下の方向で考えている。

この点についてまず注目すべきは、これらがいずれも未来における非断続的な状態を述べている点である。例えば、(16)における味方であるということは、決して途切れることなく継続する状態である。これに対し、例えば(14)における「猛勉強」のように「いつも」の生起を許さない例では、あくまで断続的に生起する複数回の動きの発生を述べている。大学院入学後に猛勉強するという事態は、未来において習慣的ながら断続的に生起することが期待されるものであり、未来のどの時点にいても「猛勉強する」という事態を観察することができるものではない。「\*いつも猛勉強するぞ」が成り立たない理由はこの点に求められる。

他方、(16)「味方である」、(17)「元気でいる」、(18)「素敵な貴方でいる」ということは、未来において途切れなく成立する非断続的な事態の存在を述べるものである。これらは未来のどの時点においても観察可能な事態である点で、(14)「猛勉強する」等とは性質が異なる。以上が、非断続的な非経験事態を述べる場合に「いつも」の使用が適切となる理由であると考えられる。

さらに、例外らしき事例の2つめのタイプである。「～ようにする」の文においては、非経験事態について「いつも」の使用が自然である。

(19) a ?明日から、いつも6時に起きてください。

b 明日から、いつも6時に起きるようにしてください。

(20) a ?これからは、いつも処方された薬を飲んでください。

b これからは、いつも処方された薬を飲むようにしてください。

(19a)と(20a)について、やや微妙な判断ではあるが、「いつも」の使用はやや不自然な

印象をぬぐいきれない。この点は、2. 2. 1でみたように、非断続的な未来の事象が知覚経験に基づいているとは考えにくい点にその理由が求められよう。他方、「～ようにする」においては、「いつも」の使用がごく自然である。この理由についても、本稿としては確定的な結論を得ていない。これも暫定的なものではあるが、次のように考える。

「～ようにする」は、動詞が示す本来は断続的に発生する事態に関して、その実現を非断続的に試みるという点で、述部全体を非断続的な性質に変える働きがある。非断続的な事態は、仮想的には未来の事象に関しても、どの時点においても観察可能なものであるため、「いつも」の使用が自然となる。つまりこの見方によれば、(19b)「いつも6時に起きるようにする」等が自然であるのと、(17)「いつも元気である」等が自然である理由は同じである。より具体的な形で述べるならば、(19b)においては、「6時に起きる」という断続的で一回性の事態の生起が、非断続的に意図されていることを述べている。非断続的に意図されているサマは、どの時点においても成立するものであり、この点が「～ようにする」にいて「いつも」が自然に生起できる原因となっている。<sup>\*2</sup>

### 2. 3 「いつも」と文脈的無標性

「いつも」が経験記憶について述べるものであり、現実世界のありようと対応するものではない。冒頭の例(1)における母親は、週4回、娘が学校に間に合っていることと、週2回遅刻していることを知覚している。(1a)において「いつも遅刻して～」と述べる場合、母親は週2回の経験から形成された集合における<全該当>を述べるものであるが、同様に知覚された週4回の間合った事例はここでは言語化されていない。2種類の経験のうち、1つだけが言語化される背景について考える必要があるだろう。

上述の背景として、「いつも」には当該の時点における話者にとって活性化された無標の情報についてのべるというもう1つの重要な側面がある。換言するならば、「いつも」を発話する場合、話者は当該の文脈、状況のもとで想起されている情報について述べるという特徴がある。したがって、当該の文脈・状況において問題とされることなく活性化されていない情報（(1)の例では娘が学校に間に合っているということ）については言及されることがない。母親はあくまでその時点で自然にぱっと思い浮かんでいる経験記憶を述べており、あえて自分の経験を客観化しようという意思を働かせたわけではない。

<sup>\*2</sup> 前田(2006)は、「～ように」に関わる諸形式を幅広く扱った包括的な研究である。「～ようにする」に関して、次のように述べている。

(i) 前田(2006:77)における「～ようにする」についての言及

「ようにする」を用いると、すでに指摘されているように「実現への努力をする」というニュアンスがでてくる。また、「努力する」のであるから、その実現は明らかではなく、仮定的な事態、すなわち成立の可能性のある事態となり、また、一回の動作ではなく、習慣的な意味、すなわち一定の期間に複数回成立する事態であるという解釈も表される。

「いつも」は、文脈依存的な意味での「平常時」について述べる。「平常時」というのは、言外にそれ以外の「非常時」ともいうべきケースがあるという前提にたつものである。時を表す副詞類には、「いつも」のように平常時と非常時という対比を前提にするものと、そのような対比を前提としないものに分けることができる。また、前者の対比を前提とするものの中に、「いつも」のように文脈依存的に平常時と非常時の対比を構築するタイプと、対象属性的に対比を構築するタイプがある。このことを順を追ってみたい。

まず、時を表す副詞類に、平常時と非常時という対比を前提にするものと、そのような対比を前提としないものがあることを確認したい。下の例にみるように、「いつも」「普段」はこの対比を前提とする一方、「常に」「必ず」「毎日」はこれを前提としない。

- (21) いつもは自転車で行く。→ 雨の日はバスで行く。  
→ お父さんがいる日は車で行く。
- (22) 普段は自転車で行く。→ 雨の日はバスで行く。  
→ お父さんがいる日は車で行く。
- (23) {\*常に／\*必ずは／\*毎日は} 自転車で行く。

「いつも」と「普段」は、対比の「は」で取りたてることができる。(21)と(22)は、何ら特別な条件が関与していない平常時において、「自転車で行く」ことが述べられているが、言外に「雨が降っている」「お父さんがいる」といった何らかの条件が関与した場合は、別の可能性があることを示している。他方、(23)にみるように、「常に」「必ず」「毎日」にはそもそも対比の「は」を添加することができない。これらは平常時と非常時の対比という前提自体をそもそももたないものである。

それでは、平常時と非常時の対比を前提にするという点で同じ性質の「いつも」と「普段」の相違は、どのような点に求められるのだろうか。これについては、「いつも」における両者の対比が文脈依存的になされているのに対し、「普段」における対比が対象属性的にさなれている点にある。

- (24) a あなたは {いつも／普段}は何をされているんですか？  
b 週末は、あなたは {いつも／??普段}何をされているんですか？  
c 平日は、あなたは {いつも／?普段}何をされているんですか？
- (25) a 雨が降った時は、{いつも／\*普段}どこに行くの？  
b 友達が遊びに来たら、{いつも／\*普段}何をして遊ぶの？
- (26) 普段着／普段使いの食器

(24a)にみるように、「いつも」も「普段」も平常時を表している点に違いはない。ただし、当該の文脈において、何らかの条件を関与させると、「普段」は機能しない。(24b)(24c)において、「週末は」「平日は」という条件を関与させた場合、「普段」の使用は明らかに不適切である。(25a)(25b)も同様で、文脈的に条件が関与した場合、「いつも」はその条件下での平常時について述べることができるが、「普段」はそれが不可能である。「普

段」が前提とする平常時と非常時の対比とは、文脈依存的なものではなく対象属性的なものであろう。(26)にける「普段着」とは、当該文脈に依存する形で与えられた条件を問題にしているとは考えにくい。そのため、衣服を表す「着」を修飾・限定する形で複合名詞を形成することができる。

以上、2節では、「いつも」の特徴をみてきた。冒頭で指摘したように、週に2回のペースで遅刻している娘に対し、母親が「いつも遅刻して」と述べるのはまったく自然な発話である。その場合、母親は当該の状況に依存して活性化されている記憶の集合を参照し、その記憶集合内において「遅刻」が<全該当>であり例外がないと述べている。また、もう一点重要なことは、当該の時点における話者にとって活性化された無標の情報「娘の学校への遅刻」であるため、「娘が学校に間に合う」という事態はその時点で活性化されていないため問題とされずにすんでしまうことである。

確かに、われわれの日常の言語使用は必ずしも厳密なものではない。しかしながら、同じく<全該当>ともいうべき特徴を共有する「常に」「だけ」「全員」等が同じ振る舞いをみせないことから、「いつも」等の曖昧さを日常言語の曖昧さという点のみに帰することはできない。最も重要な点は、「いつも」が問題にする<全該当>が、現実世界のありようではなく、知覚経験に基づいた記憶の集合を問題にしている点にある。

### 3. 「いつも」と「ばかり」の共通点と相違点

#### 3. 1 この節における問題のありか

冒頭の(1)～(5)に示したように、語義として<全該当>という特徴を有しつつ、大幅な例外を許容するという点で主観的な語は、頻度副詞「いつも」だけではない。品詞という文法的な位置づけは異なるものの、取りたて助詞「ばかり」、集合名詞「みんな」も同様の振る舞いをみせる。これらがみせる表面上の共通性の背後には、共通する普遍的な認知的基盤が存するのだろうか。この点を検証するためには、それぞれの語に対する詳細な分析を積み上げる必要がある。

本稿の筆者は、佐藤(2017)において、取りたて助詞「ばかり」の分析を行った。集合名詞「みんな」については、現時点において詳細な知見を得ていない。この3節では、本稿における「いつも」の分析と、佐藤(2017)における「ばかり」に関する分析をもとに、2つの語の共通性と相違点を明らかにする。結論としては、両形式がともに話者の知覚経験に基づいた経験記憶の集合における<全該当>を表している点では共通している。他方、「ばかり」において集合の形成を動機づける「認識的際立ち性」という特徴は「いつも」においては認められないことを指摘する。



### 3. 2 共通点：「ばかり」ならびに「いつも」における知覚経験

佐藤（2017）に先んじて、菊地（1983）と定延（2001）は、取りたて助詞「ばかり」における主観性と、その背後にあるわれわれの知覚や経験の関係を指摘している。

わけても定延（2001）は、「ばかり」が現実世界における集合のありようでなく、経験に基づいた集合を問題とする旨を説得的に分析している。定延（2001）の説明によれば、「みわたす四方は海ばかり」という表現において述べられているのは、明らかに海が複数存在することではない。前後左右と周囲を探索するという事態が述べられており、同じものが複数存在するとされているのは、海という現実世界における事物ではなく、「まわりをみわたす」という探索行為である。「探索」とは身の回りのありようを知ろうとする心身の行為のことであるが、知覚経験は能動的な探索行為を前提として得ることができるものである。

<全該当>という特徴を有しつつ、ともに大幅な例外を許容する「ばかり」と「いつも」は、現実世界における集合の<全該当>を述べているのではなく、経験記憶の集合における<全該当>を表しているという点は、共通しているとみてよい。本稿の2. 2. 1において論じたように、「いつも」は経験記憶に基づくため、経験されていない未来事象は知覚経験の対象とならないために不自然となる。佐藤（2017）は、「ばかり」について同様のことを、次のような例をあげながら指摘している。

(27) a \*処方された薬ばかりを飲んでください。

b 処方された薬だけを飲んでください。

(28) a \*気の合う友達ばかりを誘おう。

b 気の合う友達だけを誘おう。

(29) a \*面白い試合ばかりを見に行きたい。

b 面白い試合だけを見に行きたい。

上のbの文における「だけ」は、「ばかり」と同様<全該当>を表す限定の取りたて助詞であるが、例外解釈を許容しない。「だけ」は現実世界における集合を問題にするため、知覚経験に依拠する必要はなく、未来の事象に関しても十分自然に用いることができる。他方、「いつも」と同様例外解釈を容易に許容する「ばかり」は、この点の振る舞いのうえでも「いつも」と同様で、未来事象の叙述には用いられない。

このように、頻度副詞「いつも」と取りたて助詞「ばかり」は、品詞という文法的な位置づけをこえて、知覚経験に基づく経験記憶の集合における<全該当>を述べるという点において、認知的基盤を共有するものと考えられる。<sup>\*3</sup>

<sup>\*3</sup> 大塚（2021）は、「いつも」の意味を類義関係にある「常に」との対比で論じている点でやや本稿と眼目の異なるところもあるが、「いつも」の意味を「生起時や生起回数を問わず、話し手の複数回の認識の中で同じ事態が確認されることを表」（36頁）すとしており、大筋において本稿の論述と軌を一にすものである。

### 3. 3. 2 相違点：認識的際立ち性の関与

佐藤（2017）は、「ばかり」において経験記憶の集合が形成される動機として、「認識的際立ち性」という概念を指摘している。「認識的際立ち性」とは、当該の主体にとって何らかの意味において容易に捉えられるもの、捉えずにはいられない際立ちをもつものである。

(30) a 太郎は授業をさぼってばかりだ。

b??太郎は授業に出席してばかりだ。

(31) a 花子は約束をやぶってばかりいる。

b??花子は約束を守ってばかりいる。

(30a)における「授業をさぼる」、(31a)における「約束をやぶる」は、われわれの通常感覚としてはあるまじき行為とされるもので、対極にある「授業に出席する」「約束を守る」が当たり前のこととされるのに対して、それらが発生した際は注目を集めずにはいられないものであり、その意味で際立ち性のある事態である。「認識的際立ち性」には、知覚的なものと話者の信念上のものの2種があるとされるが、これらは後者のタイプである。「ばかり」は際立ち性の認められる(30a)「授業をさぼる」、(31a)「約束をやぶる」において自然であるのに対し、際立ち性のない(30b)「授業に出席する」、(31b)「約束をまもる」において使うことができない。

同様の観点から「いつも」をみた場合、「ばかり」とは異なり、認識的際立ち性は関与していないようである。下の例が示すように、「いつも」においては、(32b)「授業に出席する」、(33b)「約束を守る」においても問題なく機能することがわかる。

(32) a 太郎はいつも授業をさぼっている。

b 太郎はいつも授業に出席している。

(33) a 花子はいつも約束をやぶっている。

b 花子はいつも約束を守っている。

このように、「いつも」と「ばかり」は、ともに話者の知覚経験に基づいた経験記憶の集合における<全該当>を表している点では共通する一方、「ばかり」において集合の形成を動機づける「認識的際立ち性」という特徴は「いつも」においては関与していないことがうかがわれる。

## 4. おわりに

本稿の主要な論点は、次のようにまとめることができる。

- ①頻度副詞「いつも」は、取りたて助詞「ばかり」、集合名詞「みんな」と同様、<全該当>を語義の基本としつつ、大幅な例外解釈をも許容する。

〈全該当〉を表す語の主観性と集合形成—頻度副詞「いつも」と取りたて助詞「ばかり」の比較—

- ② 「いつも」は、知覚経験を通して得られた経験記憶の集合における〈全該当〉を表すものである。経験記憶の限りにおいてはあくまで例外がないため、母語話者の直観として〈全該当〉の意味を有することになる。他方、あくまで話者の経験記憶内における〈全該当〉であるため、現実世界における例外を許容することとなる。
- ③ 「いつも」を発話するにあたって、話者は発話時点における文脈・状況の下で活性化された無標の情報について述べる。つまり、その時点で「ぱっと」思い浮かんだ経験記憶を述べる。
- ④ 同じく経験記憶の集合における〈全該当〉を表す取りたて助詞「ばかり」において、記憶集合形成の動機となっていると思われる「認識的際立ち性」という要因は、「いつも」においては関与的ではない。

大幅な例外解釈を許容しつつも基本的語義として〈全該当〉という特徴を有する、一見したところ矛盾するかにもみえる「いつも」の両面を理解する鍵となる概念は、上記②にある通り、「いつも」が知覚経験を通して得られた経験記憶を述べる点に求められる。これは、同じ性格を有する「ばかり」とも共通する特徴であり、この種の現象を理解する鍵となるものと言えよう。

#### 参考文献

- 大塚貴史 (2021) 「「いつも」と「常に」の意味」『筑波日本語研究』25:36-56 筑波大学人文社会科学  
研究科日本語学研究室
- 加藤重広 (2009) 「動的文脈論再考」『北海道大学文学研究科紀要』128:195-223
- 菊地康人 (1983) 「バカリ・ダケ」『意味分析』国広哲也 (編) 東京大学文学部言語学研究室
- 定延利之 (2001) 「探索と現代日本語の「だけ」「しか」「ばかり」」『日本語文法』1-1
- 定延利之 (2002) 「「インタラクションの文法」に向けて：現代日本語の疑似エビデンシャル」『京都  
大学言語学研究』21:147-185 京都大学言語学研究室
- 佐藤琢三 (2017) 「〈全該当〉を表す語の主観性—取りたて助詞「ばかり」を中心に—」『国語と国文学』  
94:3-16 東京大学国語国文学会
- 前田直子 (2006) 『「ように」の意味・用法』 笠間書院
- 矢澤真人 (1987) 「頻度と連続—連用修飾成分の被修飾単位について」『学習院女子短期大学紀要』  
25:1-18 学習院女子短期大学

付記 本稿は、2017年3月11日、国立国語研究所シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—形態論・意味論・統語論を中心に—」（於キャンパスプラザ京都）において「〈全該当〉を表す語の主観性と集合形成」と題して行った口頭発表の内容に基づいている。

(本学教授)

